

レポーター：学芸員の吉田さんです。吉田さん、よろしくお願ひします。

学芸員：よろしくお願ひします。

レポーター：吉田さん、こちらの作品。すうーっとなんだか流れるような感じがするんですけども、どのような作品なんですか。

学芸員：はい、この作品は富永朝堂という彫刻家の作った、谷風、谷に風って書いて、こくふうって読むんですけど、という作品です。流れるような感じっていうのはその風のイメージではないでしょうか。

レポーター：その富永朝堂さんはどういった方なんですか。

学芸員：はい。福岡の今の博多区ですね、にあたるところで生まれた人で、同じく福岡出身の山崎朝雲という彫刻家がいたんですけど、その人に弟子入りをして修行を積んだ彫刻家なんですね。その朝堂、朝にお堂の堂って書くんですけど、それは師の山崎朝雲も、朝の雲って書くんですけど、その一字をもらって朝堂っていう風な名前になった人なんです。

レポーター：こちらの谷風という作品はどういった特徴があるんですか。

学芸員：そうですね、まず谷風っていうタイトルなんですけど、ちょっと聞き慣れないかなと思うんですが、詩経という中国の古い経典があって、それにその谷風というのは東風のことであるという風に出てるんですね。

レポーター：はい。

学芸員：その東風なんですけど、富永朝堂が自分のこの作品について解説をしているところによると、その谷風というのは、春の風のことであります。

レポーター：春。

学芸員：はい。春、夏、秋、冬の四連作をもともとこう考えていて。

レポーター：はい。

学芸員：春はその谷風、夏は凱風と、いくつもコンセプトがあつたんですね。もともと発表されたときは、対極四連作のうち谷風、という風に出品されていたんです。でも、結局四連作にはならず、この春を表すこの作品ができたということなんですね。

レポーター：ええー。他の夏や冬や秋は。

学芸員：は、けっきょく作らなかつたんです。ただ、対になる作品という風に考えられてる潮満瓊（しおみつるたま）っていう、それは女の人が上から、天女の人のような人が上から下にこういう風になって、それもまた流れるようなリズムのある作品なんですけど、それが福岡の県立の美術館に所蔵されているのですが、それと対になる作品です。

レポーター：こう、じーっと間近で拝見させていただくと、爪のところに赤いマニキュアを塗っているように、見えるんですけども。

学芸員：いいところに。この作品が新聞展、第2回新聞展っていう1939年なんですけ

ど、にまず出品されてすごく評価が高くてサンフランシスコの万博にまあ出品されることになったんですね。

レポーター：へえー。

学芸員：そのときに、同じく絵画をこう出品しようとしていた和田三蔵という画家がいまして、その人がこの色に気が付いて、これどういう風にしたんですかって尋ねたんですよ。

レポーター：はい。

学芸員：そしたら、富永朝堂が語ったんですけど、そのもともと朱を混ぜた漆を全体に塗った。その上にこう様々な色を重ねて、それをまたはぎ落して、また重ねてっていう作業をこう数多く繰り返した。そうなんですね。その一番下にあったその漆の朱を混ぜた漆の層が後になってからこういう風に、爪もそうですし、あとこういうところに、こうちょっと、残ってるんですけど。

レポーター：ほんとですね。

学芸員：浮き上がってきたっていう風にいつてるんですよ。もともと後からその爪をちょうどマニキュアみたいですけど、塗ったものではないんです。

レポーター：へえー。何か意味があってこちらの左手ですか、だけに塗ってあるのかなと思いました。

学芸員：上なのでちょっと見づらいですけど、あのもう片方の手にも見えますし、他にもいろんなところに、複雑に作られている色なので、出てきているんですよ。特にこの作品は富永朝堂が自分の作品の中でも、特に好きな作品だっていう風にいつていまして。

レポーター：へえー。

学芸員：最初におっしゃったすうーって流れるようなその行き詰らないで、こうずっと巡っていく感じというか、こう流動感を宇宙の四連作をもともと構想してたわけですから、その宇宙で漂う気の流れというか、そういうものを、それがそのまま現れたような、流れるようなこう形を目指して、作られた作品でなんです。

レポーター：止まっているものなんですけど、なんか動いている感じがしますよね。

学芸員：んー、そうですね。そのいろんな角度からこう見てみたくなる、作品だと思います。

レポーター：こんなに間近で見られることはなかなかないですよ。

学芸員：はい、ないですね。